

---

# なんとなく夢を

めたむん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんとなく夢を

### 【Nコード】

N7573F

### 【作者名】

めたむん

### 【あらすじ】

果てしなく繰り返される毎日を打破するために、私は夢をよりどころにするが……。

いつも通りヒステリックに鳴る時計のベルが僕を叩き起した。

時計の針を見るとすでに10時を回っている。窓の外を見やると、影が濁り混ざった光が、私の部屋を指していた。それにしても掛け布団は暖かくて気持ちがいい。

ずっと抱いていたくなる。だから次に時計を見たときには11時20分を針が指していた。

私はゆっくりと体を起こし、地に足をつけ、クローゼットを開け、身支度を整えた。いつものように自分の部屋から3駅ほど離れた街へ徘徊することを決めた。

洋服を見る、立ち読みをする、ショッピングモールを歩く、これが私の休暇の取り方となっている。

私は家の鍵を閉め、いつもの駅へ向かい、歩いた。駅の途中、プードルを連れたカップル、笑顔を交し合いながら話をする男グループにすれ違う。

私はそれを横目に彼らを見る。すると、必ず彼らと眼が合ってしまう。それがたまらず嫌であったが、この習慣は直りそうにもない。

前の信号が赤になった。横断歩道の前で突っ立っている時、ふと頭を上げると、山が見える。この山は街を覆うほど壮大であり、だからこそ、この山を登ってやろうと胸に決めていた。

私があこの山を登る姿が創造できる。

目を細めるほど眩い光、鳥の囀り、何かが始まる肌寒い冬の風。私は、頂上を目指す。

汗をかき、息が荒くなるが、期待感に胸を膨らませながら、一歩一歩、前へ進む。

しかし、そんな幸福な妄想は、信号が青になり歩き出すときにはすっかり姿を変えている。『山登りは、準備をするだけでも苦労しそうだ。』

バック・靴・ジャケット、結構な金になる。そもそもどこに買えばいいのかもわからない。街中を歩く格好、黒いＴシャツ、短パン、スニーカーなんて物で問題ないのだろうか。

うまく準備できたら、山の麓までは歩いていくか、車で行くか、なんて話になる。

そこから、いざ頂上まで登ろうなんて考えると、半日はかかるだろうか、その時間って無駄だろう。さあ、やっと頂上だ。

ああ、着いた。

後は何があるだろうか。自分が頂上に着いて、何の得があったか。自分の明日に影響があるか。

いやいや、結局、何も変わらないだろう。』

いつも、この一連の流れを得て、この妄想は区切りがつく。

駅前に着くと、怒声に近い声が私の耳を殴り続けた。

年離れた1人の男がスピーカーを使い、叫び続けていた。「大神様が蘇った。皆、逃げるがよい。」その声には、哀願よりもなぜここまでやっているのに動かないのだというおこがましさを肌で感じる。通り過ぎる人間は皆、彼に目を合わさない。

彼の周りには、携帯電話で彼を写真に撮ろうとする若者がいるくらいである。私は好機の目で彼に近づいた。

私はマジマジと彼の風貌を見やる。

白髪頭で太い眉毛に釣り上がった目、年齢は60代であろうか。

背筋は自由に動けないであろうほどに曲がっており、神官の服装をしている。

「いったい、どうされたのですか」、私は彼に話しかける。

「大神様が蘇るんだ。2万5千年の眠りから目が覚めるんだ。ああ、

もう終わりだ。だって、そうじゃろう。彼に立ち向かえるために私たち人間は生きてきたのに、この2万5千年、わしらは何をしてきたんだ。わしが皆を助けるために、必死に頑張ってきたというのに、お前達はその努力をぶち壊したんだ。」

早口で神官が言う。

まるで叱り付けられているようで、私は胸がムカムカとする。ただ、好奇心のために質問を1つ投げかけただけで、まるで人格を否定されたようである。

「何をおっしゃているのか、私には皆目、理解ができません。何か大変なことでも起きたんですが。あなたはその惨事を防ぐために、何をされてきたんですか。」

私は、紳士である。だから、取り乱さず、彼に仕返しのもつもりで質問を投げかける。

彼はわざとらしいぐらい呆れ顔を前面に表し、また怒鳴り散らした。「今更何を言ってるんじゃない。さっきのスピーカーが聞こえなかったのか。」

わしは、大神様を諫めるために、わしは仏壇に向かい、お祈りをした。それに毎晩、わしは飯を抜いてやったんじゃない。お前らのために数えるとキリがない。」

「ああ、その大神が今日、蘇らないことが、あなたにとつて夢みたいなものなんですね。」

なぜ、こんな突飛な質問をしたのか。私自身、よくわからなかった。「なにを馬鹿なことをいつとるんじゃない。夢だなんて甘ったれたことをよく言えるもんじゃ。わしはこうみえても、50ぐらいまでは、金を稼ぐために物を運ぶ仕事をしてたんじゃ。聖職者というだけでは食っていけないようだな。それがこの国の悪いところであり、もつとも罪深いことだ。なんといつても、そのせいで、今は世界の危機に瀕しているわけだからな。まあいい。そんなときにガキが、20過ぎのガキがわしの会社に入ってきたんだよ。こいつがまた役立たずなんだ。伝票の書き方も知らんし、酒も飲めんしな。そいつがほ

ざぎよった。30までにプロのミュージシャンになりたいとか。考えられるか。そんなもん目指してなんになる。なれるわけがなく、そもそも、人には人としてあるべき姿があるんじゃない。そもそも、そんなことされちゃあ、わしの作業量が増えるばかりじゃ。人に迷惑をかけたらいかんということは、人としてのマナーとして最低限のことだからな。だからわしはその若造の戯言を制止させたんじゃない。ん、わかるだろう。それくらいわかるだろう。」

私はこの男と話すことはもうないことを理解した。

私は駅の改札口へ進むために、彼に背を向けた。

「おい、ちよつと待ってくれ。まだ話は終わっておらんぞ。お前は人と話をするときの態度がなってないようだな。」

彼は、スピーカーを使い、哀願するように怒鳴った。

それを聞き、私は彼の傲慢性の中に絶望的なほどの悲哀があることがわかった。

いよいよ駅の改札口を通り、2階へ上がり、ホームで電車を待った。

すると地面が上下に揺れ、耳の鼓膜を突き破るほどの爆発音がする。私は、その衝撃で私は線路へ転げ落ちてしまった。

何事かと立ち上がり、ふと山のほうが見えると、なんと山の形が大きく変わっていた。

山が真っ赤になり、噴火していた。

いや、山が真っ二つに割れていたのだ。

そして現れたのは山の5倍も背が高い巨人である。

ただただ、赤くて液体がただ固まっただけの大きな人型。

私はその光景に見とれていると、突然、大きな衝撃が私の右から襲ってきた。

すると突然、まるでジェットコースターでの2回転する感覚と同じように、私はクルクルと廻り向けて倒れた。

どうやら、私は電車に轢かれたようだ。場所がどこやらわからない。ホームではないようだ。先ほどの衝撃で地面に落ちたらしい。顔や体が熱いが、それ以上に睡魔が襲う。

私はそんなことより先ほどの山が気になり、もう一度、山の様子を確認する。

すると、山はすでに溶けてなくなっており、巨人は一步一步、確実に山を降りてきていた。

その巨人の足下を見ると、その周りはドロドロと真っ赤に溶けて、固体から全て液体の、溶岩の海のようにである。

まあいい。今考えても、結論はでそうにない。

今日のところは眠って、また明日考えることにしよう。

何よりあの山が消えてなくなってくれてせいせいしているんだ。

あれが私にとつてすでに苦痛の産物であり、現実に呼び戻されるだけの代物でしかないことは知っていた。

だから、今の私は安心感に包まれているんだ。

私は、フカフカしたベッドで寝たほうが気持ちよいと、朝のことを恋しくなりながら、瞳を閉じた。

(後書き)

初めて小説を書きました。まだまだ反省すべき点がありますが、  
—  
歩一歩成長していければいいなと、思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7573f/>

---

なんとなく夢を

2011年1月30日03時33分発行